

聖餐礼拝説教要旨【2015年12月6日】

「すべての人が信じるために」

イザヤ書 第9章 1節～7節
ヨハネによる福音書 第1章 6節～8節

説教 岡村 恒 牧師

「彼によってすべての人が信じるためである。」(ヨハネによる福音書 第1章7節)神のひとり子イエス・キリストが地上においでになった。この季節、世界中で暗闇が明るく照らされますけれども、ただ目に見える暗い世界が明るくされるのではなくて、全ての人が本当の光を心に受けて、神を信じて生きるようになる、それがクリスマス目的です。

ヨハネによる福音書は、「初めに言があった。」(1章1節)と語りだす福音書です。今日、私たちは多くの情報に囲まれています。しかし、そのほとんどが、私たちに悲しみや痛みを与えます。良い情報でさえ私たちに自由に豊かにするよりは、むしろ縛り、捉えます。

神は言葉によって、この世界をお創りになりました。そして神の言葉が私たちを支えているのです。ところが私たちは本当の情報を聞き逃して、恐れや悲しみを与える言葉に振り回されています。終わりの日、解き放たれる日を待っていると聖書は言います。

代々のキリスト者は2,000年の間クリスマスを迎える度に自らの闇に目を留めて歩んできました。待降節に、説教卓に紫色の布を掲げ、日曜日に来る度に1本1本ローソクに火を灯していくのはなぜか。自らの罪を悔い改め、神の前に懺悔をして、神を讃美するためです。世の中でなされているイルミネーションは、やがて消えてしまいます。しかし私たちが祈るたびに神に求め、叶えられる光は真の光です。

神の光に照らされるとき、私たちは自分自身の罪が、どれほど深いものか思い知らされます。他人の命を奪うほどの心の奥底の闇が、実は私たち1人1人の内にもあるのです。主イエスが生まれたあのクリスマスの時、ベツレヘム近郊では2歳以下の男の子が大勢虐殺されました。主イエスは、無実であることが証言されながら十字架に磔にされました。これが私たちの罪の闇だと聖書は言います。

クリスマスに旧約聖書の約束が実現したことを聖書は語ります。光と無縁な場所、神に顧みられるはずのない絶望の一番深いところに、1人のみどりごが与えられたと言うのです。神のひとり子が天を引き裂くようにして地上に降って来られました。詩篇の中に、天から降るとい

う言葉があって、それはテントを引き裂くことだという解釈があります。神のひとり子は、そうして暗闇の中に住んでくださいました。住むという言葉は、テントを張るという言葉です。私たちの暗闇の真只中に神の一人子が降って来てもそこに迎え入れる宮殿はなく、みすばらしいテントを張って住んだと聖書は描きます。

「ひとりの人があって、神からつかわされていた。その名をヨハネと言った。」(1章6節)バプテスマのヨハネは、「光ではなく、ただ、光についてあかしをするためにきたのである。」と語ります。(1章8節)彼の語る証言が聖書に記され、今日私たちの前でまた証されています。真の救い主、そう言ってヨハネは主イエスを指さしました。誰もが主イエスを信じて光の中に移され、永遠の命を手にするための証言です。

粗末な場所で生まれ、飼い葉桶で寝かされたような惨めな一人の幼子の誕生が、全世界の人の闇を照らす光であると聖書は語ります。真の光、そう呼ばれる主イエスは、昔も今もそして永遠に変わることはない光です。

主イエスはヨハネによる福音書の中で繰り返しご自分について、お語りになりました。わたしは命の水だ、道だ、真理だ、命だ、ぶどうの木だ。ヨハネは光を指さし、主イエスこそ全ての人の救い主であることを高らかに証言しています。今日もここで、日本中、世界中の教会で、同じ証言が語られています。神が全ての人の救いを望んでおられるからです。

私たちは主に照らされて、自らの罪に目を向けます。十字架の出来事の全てが、この私の救いのためであったことを知ります。私が赦されるために、どれほど大きな犠牲が捧げられたか、この時、私たちは思い知ります。

アドベントに世界中で叫ばれるように祈られている祈り「マラナタ(主よ、来てください。)」が今日も祈られています。私たちもその祈りに声を合わせて、顔を上げて、「主よ、来てください。」そう叫びながら、主がはっきりとした姿で、栄光の姿で私たちの前に立って下さるその日を心待ちにしたいと願います。全ての人が信じるために主イエスが来てくださったことを感謝しましょう。

(記 説教要約奉仕者)